

愛 と 結 婚

— 『アミーリア』について —

雲 島 悦 郎

H. Fielding (1707-54) の作品 *Amelia* (1751) では、結婚のあるべき姿は、どちらかといえば、主人公である Booth 夫妻の生き方を通して示され、結婚の腐敗墮落した姿は、彼らとの比較対照の形で、他のカップルの生き方を通して示される。

結婚に関する作者の考え方を探ると、結局、結婚は人生を集約するものであり、作者がこの作品で人生について述べる “THE ART OF LIFE” (「人生芸術」) 論は the Art of Marriage 論としても通用すると思われる。そして、人生一般に関して言えることの多くは、結婚についても言えることになる。

その「人生芸術論」によれば、人生は成り行き任せとか、その時々自分の支配的な感情にただ流されるだけのものであってはならないということになるが、同様に結婚も単なる成り行きとか感情のままに成立するものであってはならないということになる。そうすると、当然のごとく、思慮分別が大切ということになるが、しかし地位や財産にこだわる、本人や親の野心を満たすための結婚は、崩れた意味での思慮が働いているに過ぎないものと考えられる。

日本語の「結婚」は「男女が夫婦になること」の意味が強いようようだが、本論では、英語の “marriage” の意味、即ち「男女が夫婦になるこ

と」と「男女が夫婦であること」（「結婚生活」）の両方を頭に置いて、最初の方では主に前者の意味で問題にする。

この作品でも、結婚は恋愛結婚（“match of love”）が理想とされ、地位・財産目当ての、便宜（“conveniency”）のための結婚は否定される。¹⁾ 作品の中で、地位・財産を得るのが目的で結婚する代表的人物は Miss Bath（のちの Mrs. James）である。

...she had never had any violent Affection for James; the Match was of the Prudent kind, and to her Advantage: for his Fortune, by the Death of an Uncle, was become very considerable; and she had gained every thing by the Bargain but a Husband, which her Constitution suffered her to be very well satisfied without. (IV, iv)²⁾

彼女の結婚は愛情の伴わない「思慮深い」もので、それゆえ彼女はこの結婚という取引で得はするが、肝心の夫は手に入れなかったも同然である。しかし、彼女は体質的に夫がいなくても満足できるというのである。ところが、Amelia は James 達の結婚が恋愛結婚だったのか便宜のための結婚だったのか人に問われたとき、Miss Bath には財産がほとんどなかったから、Colonel James にとっては（財産目当てとは考えられないので）恋愛結婚であったはずだと答える。しかし、後でも述べるように、彼の感情は真に愛と呼べるようなものでは決してない。

この作品で、いろいろな点で作者の代弁者とみられる Dr. Harrison は、最初 Booth を Amelia と結婚させまいとするが、その意図を次のように説明する。

'My Intention was to preserve a worthy Lady from a young Fellow of whom I had heard no good Character, and whom I imagined to have a Design of stealing a human Creature for the Sake of her Fortune. . . . I have known some Instances, and have

heard of more, where such young Fellows have committed Robbery under the name of Marriage.’ (II, iv)

Fielding の作品の中では、よく悪の典型は泥棒行為として表されるが、ここでは、財産目当てに結婚することが「結婚という名の泥棒」とされている。そして、Booth も最初は Dr. Harrison にその手の輩と見られていたのだ。

Amelia の母親は娘の結婚相手に地位・財産を求めるがゆえに、Booth と娘との交際を認めようとしなない。Amelia は母親から財産を相続する見込みがあるのに対し、Booth については遺産相続の見込みなどは特に触れられず、本人の口からは、将校としての手当以外に収入の道はないという事実が伝えられる。

そして、Booth の方は Amelia への私心のない愛 (“disinterested love”) ゆえに、結婚した場合に彼女にかかる不便を思って愛の告白をためらうし、それゆえ彼女のことを諦めようとして苦しむ。

‘One Evening then, after the highest Professions of the most disinterested Love, in which Heaven knows my Sincerity, I took an Occasion to speak to *Amelia*, in the following Manner: “... Can I bear to reflect a Moment on the Certainty of your foregoing all the Conveniencies of Life; on the Possibility of your suffering all its most dreadful Inconveniencies!” (II, iii)

Amelia の主人公たちの名前は Richardson の作品 *Pamela* の主人公たちの名前をそれぞれ意識してつけているという指摘もあるが、³⁾ 内容的にも、思った以上に、Richardson の作品を意識していると思われる。特に、私心のない愛ゆえの結婚というテーマは、Fielding の立場からの反パミラの視点であり、*Amelia* の実質的主人公は誰かという議論もあるが、このテーマに関する限り、題名どおり *Amelia* こそ、望ましい結婚の仕方をする作品の実質的主人公と言えよう。

彼女は何度か作品の中で cottage での生活も、愛する人と一緒なら楽園に等しいというようなことを口にする。例えば Booth に対し “Did I not tell you then that the smallest Cottage we could survey from the Mount, would be with you a Paradise to me...?” (III, ii) と言う。又、自分は労働できるし、労働することを恥じないとも言う。それから、結婚するにあたり、階級にこだわる者は幸せになるに値しないし、幸せになれないと述べる。そして、大きな財産などは幸福には不要で、自分はそのような生活状況にも応じられると言う。自分よりも少しでも地位の低い者と結婚するのは汚れのように思うのはけしからぬことで、自分なら、どんな地位の男でも、相手が誠実なら結婚するのを恥じないと言う。そして、彼女は実際 Booth と結婚したために社会的地位も下がり、金銭的にも苦勞するが、その点で、小間使いとして労働していた Pamela が、自分を誘惑し苦しめた、本来ならば憎むべきはずでもあった地位・財産のある男と結婚するのは正反対である。

当時、財産のある家の娘は “fortune” と呼ばれ、そういう女性と結婚することは “marry a fortune” と表現された。財産と結婚するようなものである。そして Booth は軍隊仲間からは、Amelia とその種の結婚をしたと理解されるが、⁴⁾ その彼自身は Amelia と結婚し農業に従事するようになったことで自分の社会的地位がむしろ下がったと認識している。彼は田舎にいたとき、馬車を購入したりして近所の者の妬みを受けるが、そのように、彼にはどちらかという階級的には上昇志向がある。一方 Amelia については、衣服が地位とか財産などの虚飾ともいべきものを象徴するなら、立派な服を身につけていない彼女が、それをまとった Mrs. James よりも立派な貴夫人に見えるとか、同じく、Amelia が乳母の住む田舎屋で乳母のぼろ服を着たときも、舞踏会などで見るときと同じくらい美しいと評される。

Booth もやはり Amelia 同様、cottage での生活の方が宮殿の生活よりもましなようなことをいう。そして、二人の、こうした考え方は Dr.

Harrison の生き方の影響を受けたという設定になっていると思われる。⁵⁾しかし、口先だけなら誰にでも言える訳で、Miss Mathews さえも全く同じことを口にする。これはロマンスの影響もあるようで、ロマンチックな状況での決まり文句でもあったようである。⁶⁾

階級の問題は結婚の場合に限らない。ある時、Amelia が、身分の上の者（お偉方）は身分の下のを同じ人間とは考えていないのではないかと、下の者に対する思いやりにかけるのではないかとと言うと、Booth も又、人間は階級が違っても同情しあえないのではないかという感想をもらす。しかし Amelia はここで、Dr. Harrison が好んで使うというテレンティウスの言葉を思い出して口に出す。この “*I am a Man myself, and my Heart is interested in whatever can befall the rest of Mankind.*” (X, ix; Terence, *Heauton Timorumenos*, 77)⁷⁾ という言葉は、Fielding の他の作品同様、この作品でも、全ての徳の根幹にある同胞愛を的確に表す。これに対し、Booth は、人間は自己愛の原理で行動するという自説を述べる。といっても、Booth は人間には他者を愛する気持ちがないと考える訳ではない。

恋愛結婚は、相手を好きになることから始まるだろうが、ただ相手の容姿ゆえに好きになるようなことは評価されないし、それは愛とは認められない。人の容姿だけに心を引かれ、急いで結婚した場合は、長続きしないという考えも出てくる。

Booth は結婚してからは、Amelia との結婚に宿命性を感じるほどだけれど、結婚する前は、決して一目惚れではなく、彼女のことを立派だとは思っていても、愛が芽生えるまでには時間がかかったと言う。また愛情を覚えたのは、彼女が鼻の怪我にもくじけない精神の強さに心を打たれたからであるが、それから結婚を真剣に考えるのには更に数カ月かかったと言う。

Fielding の作品では、愛という言葉が、最悪の場合、相手の体に対する単なる性欲（しばしば食欲に譬えられる）を意味することがある。そし

て、単に、その欲望を満たすためだけに結婚する輩が結構いる。この作品では Colonel James が、その典型である。そして、“... as James had married out of a violent Liking of, or Appetite to her Person, Possession had surfeited him, and he was now grown so heartily tired of his Wife, that she had very little of his Company...”(IV, iv) とあるように、相手を自分のものになると、直ぐに飽きてしまい、ほとんど相手にしなくなる。

人を愛すると言っても、人のどういう面を愛するかが問題であるが、これに関連し Booth は “Beauty is indeed the Object of Liking, great Qualities of Admiration, good ones of Esteem; but the Devil take me, if I think any thing but Love to be the Object of Love.”(V, ix) と言う。この中で、愛が愛の対象であるというのは、愛してくれる者を愛するという意味と取れるが、それは、人が愛せないよりはましではあるけれど、やはり「人間は全て、いかに善人であろうと悪人であろうと、自己愛の原理で行動する」(X, ix) という彼の持論にそうもので、自己中心的である。しかし Miss Mathews の「愛は他者のためには何もなさない。己の為に全てをなす」(IV, ii) という徹底した利己性とも違う。人を弄ぶかのような愛は、あらゆる徳をも道具とってしまう暴君だという表現も出る。

... not only Tenderness and Good-nature, but Bravery, Generosity, and every Virtue are often made the Instruments of effecting the most atrocious Purposes of this all-subduing Tyrant.
(VI, i)

そして、自己愛とは反対の他己愛とか同胞愛があるかどうか、異性を真に愛せる人間かどうかの判断の基準になる。そして語り手から、相手が善良であるがゆえに愛する (“... Goodness is the Object of Love.” (X, iv) という考えが出されるが、それは結局、徳を見たうえで人を愛すべ

きだという考え方でもある。善良な人は有徳の人を愛するという意味で、「敬意が善良な心に生み出す愛」(X, iv) という表現も見られる。

しかし、Amelia は一時的に人間不信に陥ったとき、人は善良だからといって愛される訳ではなく、むしろ憎まれると我が子に言って聞かす。

‘... he[Booth] is the best Man in the World, and therefore they hate him... there are more bad People in the World, and they will hate you for your Goodness.’ (IV, iii)

又、主人公たちのみならず、人は生きていくうちに多くの敵に出会うことになるから、敵を愛するとはどういうことかも、Dr. Harrison と若い聖職者の間で議論される。

Fielding の作品では一般的に、人物を正しく捉え、正しく評価することが大切だという主張がある。昇進とか就職の場合もそうであり、結婚相手を決める問題とも関係する。職を得るとか昇進する場合にも、人の功績・長所 (merit) によるべきだということが Dr. Harrison によって力説されるが、社会の実態は、そうはなっていないことが、Booth の場合を例にして示される。軍隊で、特に功績があったとも思われない James や Bath が昇進し、一方、大怪我をするのは勇ましく戦う証拠だとすれば、一応功績があったと判断される Booth が冷遇されている。⁸⁾ そして、James と Bath の出世は幸運のお陰のように書かれており、「国営出世大宝くじ」(XII, ii)⁹⁾ という表現も出るが、しかし実際は、幸運ならば誰にでも当たるものではなく、金とか^{つて}伝などがものを言うことへのあてこすりである。国家 (body politic) が人体に譬えられ、ひどい末期症状を呈する老いぼれた肉体は、急いで手当をしないことには手遅れになると訴える。そこには、徳が重んじられ、適材適所が考慮されないような国は早晩滅んでいくという作者の危機意識が読み取れる。

結婚には形式・儀式も大切であり、それが伴わないものは姦淫 (adultery) と見做される恐れがある。しかし結婚の条件が整わず、親などに反

対された場合は駆け落ちに走る者もいる。Booth も Amelia に彼女の母親によって会うことを禁じられたときは、一度は駆け落ちしたいと思うし、あとでは実際に Amelia と母親の元から手に手を取って逃げ出す。しかし駆け落ちは、女性の場合、悪い男にたぶらかされる危険性がある。この作品の中では、現役将校の地位にある Hebbbers という男の手玉に取られ、終には男と駆け落ちをし、最後には男に捨てられ身を滅ぼす女がいるが、それが、牢屋で Booth と再会し、彼を誘惑し浮気相手となり、後には、そのことで彼を脅迫までする Miss Mathews である。

Amelia たちの結婚は、最初は彼女の母親に反対されるが、Dr. Harrison の仲立ちで母親の同意が得られる。しかし、いったん同意した母親も Winckworth という条件のより良い相手が現れると態度を変える。だが、Amelia は結婚相手を変えるようにという母親からの話をきっぱり断る。

‘... which *Amelia* had as peremptorily refused to give; insisting on her Part, on the Consent which her Mother had before given to our Marriage, in which she was heartily seconded by the Doctor, who declared to her, as he now did to me, “we ought as much to be esteemed Man and Wife, as if the Ceremony had already past between us.”’ (II, v)

Dr. Harrison も親が一旦同意した場合は結婚したのも同様であるとし、相手に余程の落ち度がない限り、同意を撤回することはできないと言って、母親の反対を認めず、結婚許可証をとって二人の式を挙げようとする。そして、このような展開の結婚も完全に合法的だと認められていた。¹⁰⁾

きちんとした手順を踏んだ結婚が大切だといっても、結婚という形式は必ずしも中身の愛を保証するものではない。相手に対する性的欲望を合法的に満たすためだけの結婚もあり、結婚して一度思いを遂げると、後はた

だ妻に邪険、冷淡に当たる男の典型が前にも述べた James 大佐である。

愛は異性愛であれ家族愛であれ友愛であれ同胞愛であれ、全て根底でつながるものとして扱われる。例えば、Dr. Harrison は、Booth の評判が良くないので、Amelia との結婚に最初は反対であるが、念のために Booth の人物調査をする。

‘...he had enquired into my Character, and had found that I had been a dutiful Son, and an affectionate Brother. Relations, said he, in which whoever discharges his Duty well, gives us a well-grounded Hope, that he will behave as properly in all the rest.’ (II, vii)

調査で、彼がよき息子で、よき兄であることが分ると、¹¹⁾それならば、よき夫にもなれると Dr. Harrison は判断し二人の結婚を応援するようになる。

幼き者に対する愛の場合も同じで、このような人の見方につけこんで、the noble Lord と呼ばれる男は、自分が甥や姪を愛し、子供好きであるところを示して女性を信用させようとする。もっとも、Colonel Bath は妹には献身的で、誰よりも愛しているが、しかし異性とかを愛することはできない人物として描かれている。その妹は結婚して Mrs. James と呼ばれるが、子供をつくることなどは考えただけでもぞっとすると言う。

しかし、愛が強調されるといっても、結婚における経済的条件が無視されている訳ではない。国のために命懸けで戦った愛国者 Booth 達のような休職又は退職した軍人が、国から十分な手当を受けていないことが、彼らの不幸の大きな原因であることが指摘されている。例えば、Booth の昔の軍隊仲間の Bob Bound は生真面目ゆえに職も得られず、Booth に半クラウンを無心しなければならぬほど苦しい生活をしている。借金のために牢に入れられている元軍人も登場する。Booth も結婚して初めて金の苦勞を痛感する。そして彼も借金が返せないため捕まる。そして、最終的

に、Booth 達が立ち直れるのも、結局 Amelia が姉に横取りされた母からの遺産を取り戻したことが大きい。¹²⁾

Amelia は作品の冒頭の “after their uniting in the state of matrimony” という言葉にもあるように、従来の作品が終わるところで始まる作品で、¹³⁾ Booth と Amelia の結婚後の事柄（結婚生活）を主に扱っている。この夫妻は愛し合って結婚し、そして、相手の愛に値する者同士であるとされる。Booth は結婚してから一層 Amelia に対する愛が強まったとも言う。Amelia が牢で Booth に面会したとき、二人が余りにも好き合っている様子なので、かえって Amelia は実際には妻などではなく商売女ではないかと疑われたりする。そのような二人にとっても、結婚の時点で人生の諸問題が全て解決していた訳ではない。夫 Booth が自家用馬車を持つという見栄を張ったため (“THE SQUIRE FARMER” と譚名される)、村人とうまくいかなくなり、それがもとで農業にも失敗し、田舎にいられなくなって、借金を背負ってロンドンの the Verge of the Court と呼ばれる一角に逃れて住んでいる。そして、いざこざに巻き込まれ逮捕され、さらに墮落した無能な裁判官 Thrasher の取り調べを受けたばかりに投獄され、更にそこで会った昔の知り合いの Miss Mathews と性関係を持つにいたって、一応幸せであった彼らの家庭に大きな翳りが出てくる。

結婚に関連し、多くの点において作者の代弁者と見られる Dr. Harrison は次のように言う。

‘And sure in a human Sense there is scarcely any Guilt which deserves to be more severely punished. It includes in it almost every Injury and every Mischief which one Man can do to, or can bring on another. It is robbing him of his Property. . . . The Ruin of both Wife and Husband, and sometimes of the whole Family, are the probable Consequence of this fatal Injury. Domestic Happiness is the End of almost all our Pursuits, and the common Reward of all our Pains. . . . Thus they become bad

subjects, bad Relations, bad Friends and bad Men.’ (X, ii)

結婚後の家庭の幸せこそ、人が最終的に求めるものであり、人の労苦に報いるものだということである。そして、人妻を寝取るとは泥棒行為に等しく、その幸せを奪われたとき、人は反社会的存在となる恐れがあると付け加える。だから、姦淫の罪は厳罰に処すべきであるが、実際、政府や教会関係者はそれに対し何をしたかと彼は更に言葉を続ける。

幸せな婚姻関係を破壊する最も恐るべき、作者の言う世間の “glaring evils” の一つである 姦淫の悪弊は、家庭の内側から夫の浮気などという形で出てくるだけではなく、外からも家庭の幸せを脅かしてくる。そして Booth 達の結婚以来、次々と色々な人物が Amelia に触手を伸ばしてくる。Amelia 達の最大の敵は the noble Lord と固有名詞なしで呼ばれる貴族¹⁴⁾ ——それ故に象徴的存在——である。彼の従姉と称する、Booth たちの最初の家主でもある Mrs. Ellison を pimp (売春周旋人) のように使い、巧みに狙った相手に接近していく。しかし Amelia は、同じ口口で彼の犠牲となった Mrs. Bennet の協力もあって危難を逃れる。この女性は姿と声が Amelia に非常に似ており、何故か二人は会ったときから、お互いに好意を覚え、それが友情に変わっていく。Amelia は会ったときから友達になりたいと思ったとも言う。Amelia は、愛についての考えが二人は一致するというが、Mrs. Bennet は悪い人間は利用すれば良いというし、実際 the noble Lord をうまく利用して二人目の夫 Serjeant Atkinson の将校職を手に入れる。そして the noble Lord に辱めを受けた後も、ためらいはあっても、結局、相手から手当を受けて生活をしている（とは言え、彼は同じ女性を二度と相手にしないこともあり、肉体関係はないようだ）。又、彼の手先となって彼女をだました Mrs. Ellison がこの件で仲立ちをしてくれたこともあって、この女にも少しは良いところもあるなどと甘い評価を下す、かなり現実的な女性なのである。¹⁵⁾ 女同士の友情と云えば、¹⁶⁾ Amelia が鼻に怪我をする前は親友だった Miss Osborne は、陰でそ

の怪我を笑いものにする敵と変ずる。結婚してからは、以前は Amelia の友であった副牧師の妻も敵になる。又、Bath 中尉（のち大佐）の妹も結婚する前は Amelia の無二の親友であったが、James 大佐と結婚してからは、途端に気位が高くなり、Amelia に対し奇妙に態度がよそよそしくなる。そして二人の間は急速に疎遠になる。また、Booth の親友であったはずの James 大佐は、Amelia を浮気相手にしようと企むに至る。そして、そのために Booth を憎むまでになるし、James 夫人も邪まな好意を Booth に寄せ始め、Amelia に憎悪さえ抱くようになる。そして、愛など元々なかった James 夫妻の間に協定のようなものが成立し、妻の方は夫の pimp のような役目に成り下がり、昔の友 Amelia を裏切ろうとする。この作品には他に、Booth の以前の軍隊仲間で、最初はたまたま妻に美人局をやらせ、次第に妻のぼん引きとなり下がり、手下の pimp を使って手を広げ、羽振りのよい生活を送っている Trent という男も登場する。妻が夫の bawd（売春周旋人）になり、夫が妻の pimp になるような例もあると Mrs. Atkinson は指摘する。James 大佐の場合は Mr. Atkinson を pimp として利用して Amelia をものにしようと企む。又、Booth 夫妻が海外にいた時は、フランス人の Bagillard という男が彼女に接近してくるが、彼女がそれを察知したと Bath の協力もあって、ことなきをえる。innocence と suspicion はなかなか相入れないとされるが、Amelia は innocent ではありながらも、¹⁷⁾この時は誘惑がよほど露骨であったのか気づくのである。

このような腐敗した状況の中では、もはや、個人の力で誘惑の手を逃れるのは至難の業である。Amelia は、男が女をねらう場合、力づくか罠を使うかのどちらかであり、女性が簡単に罠にかかるとするのは女性の理解力を見くびるものであり、本人の操が堅ければ大丈夫だというのが、とてもそうは思えない状況がある。人間関係は敵か味方に分かれ、味方がなんとか救いの手を伸べてくれることもあるが、その味方もいつ裏切り、敵に回るか分からない厳しい状況なのである。¹⁸⁾

裏切りといえ、Ameliaの家の小間使いまでが女主人の下着類を持ち逃げしてしまいBoothを激怒させる。Boothは復讐を誓うが、¹⁹⁾その間、Dr. Harrisonと若い聖職者との間で、敵に復讐すべきか許すべきかを巡って議論が行われる。Dr. Harrisonは復讐はすべきではないが、罪に対しては正当な裁きが必要だと主張する。

姦淫といっても、和姦のようなものから、the noble Lordが用意周到に策略を巡らしMrs. Bennetを飲物に混ぜものをして眠らせたうえで歯牙にかけた場合のような強姦まである。そしてAmeliaも一歩間違えば同じ手口にかかるころであった。

又、同じ姦淫でも、あらかじめ計画されたものと、そうでないものは区別される。そして、Boothについては“... though not absolutely a Joseph, as we have already seen; yet could he not be guilty of premeditated Inconstancy.”(X, ii)とあるように、彼の浮気は、あらかじめ計画されたものではないということで大目に見られている。

Boothは聖書のヨセフのように操が堅くなかったが、この作品には文字どおりJosephという名をもつAtkinsonという人物も登場する。彼はAmeliaを昔から姉のように愛していたと言う。そして、ある時彼は、もう直ぐ自分は死ぬと思い込んで、彼女が長いこと無くしたと思いこんでいた彼女の小さな肖像画を、実は自分が盗んで持っていたことを彼女に告白する。が、その前に、これから彼女に二度と会えないと思うと死ぬよりもつらいと彼が切り出したとき、Ameliaは頬を染めて俯く。その後、手に接吻させて欲しいと彼に頼まれると、ためらいながらも許す。彼の自分に対する思いを知り、更に手に接吻を許した後で、動揺の色を隠せないAmeliaの心の底に人間の本性を認めるような読み方もある。²⁰⁾そして、語り手も、彼女が夫以外の男に心を動かされないような人間離れた存在、あるいは木石のような存在でないことは認める。

[Amelia] left the House with a Confusion on her Mind that she had never felt before, and which any Chastity that is not hewn out of Marble must feel on so tender and delicate an Occasion. (XI, vi)

Atkinsonと再婚している元 Bennet 夫人は、Atkinsonが Ameliaを愛していたことに嫉妬せず、その種の愛は愛する者の徳の証しだとか、遠くの者を愛せる者は、近くの者をもっと愛せるという理屈で、むしろ積極的に評価する。ただ、Atkinsonの思いがいかにもプラトニックであったにせよ、人の妻を思うことは、それだけでも姦淫だという見方もできる。そして、人妻への好意は最初は無垢なものでも、きっと欲望に変わるとか、妻が夫の偽りの友人関係をうみだしたり、真の友人関係を損なったりするという表現も出てくる。

The Admiration of a beautiful Woman, though the Wife of our dearest Friend, may at first perhaps be innocent; but let us not flatter ourselves it will always remain so; Desire is sure to succeed... (VI, i)

...as a handsome Wife is the Cause and Cement of many false Friendships, she is often too liable to destroy the real ones. (VIII, viii)

作者は明言しないが、姦淫は社会の墮落や人間の道徳的な退廃も原因だけれど、同時に人間の本性に根差すものでもあるとも言っているように感じられるところもある。²¹⁾

誘惑者を利するような悪弊が世間にはびこっている。その中でも、代表的なものが仮面舞踏会であり、彼ら誘惑者は正体を隠し、狙う相手に近づいていく。作者は声を大にしてこのような悪習に反対する。そして、このような状況を放置すれば、個人が痛手を受けるばかりではなく、いつかは

国の滅亡につながるという作者の懸念がある。

そして作者は、諸々の悪弊・腐敗の根幹には国の制度上の問題があると考え、国の体質改善を訴えていくが、勿論、人間主体の側の徳の重要性も無視しない。Fielding の作品で、よく問題にされる *prudence* に関して言えば、金もないのに贅沢にうつつを抜かし、賭博に耽るようなことは *prudence* を欠いた典型例である。そして、そのような人間に家庭がある場合は、家庭を借金地獄に陥れかねないものであるが、Booth も悪友に誘われるとはいえ、そのような弱点を再三に亘って見せる。そして、彼が博打で 50 ポンド以上もすっている間に、子供には食べたいタートも我慢させ、自分は飲みたい一杯（半ポイント）のワイン（6 ペンス）を飲まずにいる殊勝な妻 Amelia が対照的に描かれている。

Amelia とは反対に、男勝りの情熱的なタイプの女性としては、先ず Miss Mathews が挙げられる。しかし、そのような女性は “*masculine woman*” または “*Amazon*” として、勝ち気な Mrs. Atkinson にさえ否定させている。又、このようなタイプの歴史上の人物が羅列されている箇所もある。²²⁾

このような女性に対して、男の望ましい特性としては “*tenderness for women*” が考えられており、作者は Booth に “*Tenderness for Women is so far from lessening, that it proves a true manly Character.*” (III, viii) と主張させる。Booth はやさしさ故であろう、妻のお産に立ち会ったことも語る。²³⁾

又、男のはにかみ (“*bashfulness*”) も言及されるが、これは “*modesty*” と呼ばれ、Atkinson は軍隊に 6 年間いてもこれを失わなかったという。²⁴⁾とは言っても、針仕事をするような男性は、結婚相手としては考えさせられるタイプとされている。

女性の学問の意義については、Mrs. Bennet (Mrs. Atkinson) と Dr. Harrison とのやり取りの形で問題にされるが、家庭に入る場合には、積極的には評価されていないと判断される。一人の女性に満足できない

James 大佐が、長く付き合っても退屈しないタイプの女性（実際は作者が好ましくないと考えるタイプ）を列挙するが、²⁵⁾その中にも“scholar”が含まれる。

この作品では、家庭の話が中心ということで、女の理想像は、Amelia を典型とする良妻賢母型であり、夫の食事の用意をし、子供の世話をする Amelia の姿が最高のもののように描かれる。

And if I may speak a bold Truth, I question whether it be possible to view this fine Creature in a more amiable Light, than while she was dressing her Husband's Supper with her little Children playing round her. (XI, viii)

彼女が食事の支度をしている姿は、貴夫人が舞踏会に行く支度をしているように、いそいそとしているという表現もある。また子供に宗教道徳の躰をする Amelia が母親の鑑としても提示される。

...the excellent Example which *Amelia* here gives to all Mothers. This admirable Woman never let a Day pass, without instructing her children in some Lesson of Religion and Morality. (IV, iii)

Amelia は作品中で人間の姿をした天使 (“angel in a human form”) などと呼ばれることもあるが、このように彼女を女の鑑とする見方から、もっと生きさい人間とする見方まで様々である。Amelia 夫妻がうまくやっつけられるのはお互いが徳を有し、尊敬しあっているからだけではなく、性愛関係がうまくいっているからだと感じさせられる表現がよく見られるが、“At length they [*Booth and Amelia*] retired, happy in each other [and with mutual Desires, and equal Warmth, flew into each other's Arms].” (IV, vi) はその一例である。²⁶⁾

完璧な人間の存在など信じない作者は、Amelia が生身の人間である証

拠として、彼女が Mrs. Atkinson と一緒に鏡に映った自分の姿を見てにっこりするところを、“... Indeed, I believe, the first Wish of our whole Sex is to be handsome.’ [said Mrs. Bennet.] Here both the Ladies fixed their Eyes on the Glass, and both smiled.” (VII, iii) と描写するが、このように女性の軽い欠点として、容姿に関する見栄を示す場面は作者の他の作品にも見られる。²⁷⁾

夫婦関係とか夫婦の人柄とは別に、家庭の幸せに欠かせぬものとして、家族の健康に触れているのも、病で次々と愛する家族を失った作者の言葉として注目に値する。²⁸⁾

これまで見てきたように、この作品では、もろもろの人物やカップルの結婚の仕方、家庭生活、更に広く言えば生き方を比較する中で愛の重要性が指摘されるが、その愛はあくまでもキリスト教の信仰に裏打ちされたものである。²⁹⁾

[注]

※本稿は日本英文学会中国四国支部第 49 回大会 (1996 年 10 月、於 香川大学) のパネル・ディスカッション「18 世紀イギリス小説と結婚」で、「フィールディングの *Amelia* (1751) の場合」と題して口頭発表した原稿に多少手を加えたものである。

同ディスカッションでは、最初に司会者の能美龍雄氏 (島根大学) が L. ストーン著『家族・性・結婚の社会史』(勁草書房) により、18 世紀のイギリスにおける結婚にかかわる事情を、そこに至るまでの状況を含めて概観された。本稿は、本文では特に触れないけれど、あくまでも氏の発表内容を踏まえたうえで論を展開している。

- 1) 便宜のためではなく、愛するが故の結婚という設定はロマンス仕立てでもあるが、同時に、当時の “enlightened opinion” も反映しているという。A. R. Towers, “*Amelia* and the State of Matrimony,” *RES*, 5 (1954), 150.
- 2) 作品からの引用は全て Henry Fielding, *Amelia*, ed. Martin C. Battestin

- (Oxford: Clarendon Press, 1983) による。
- 3) 例えば, Pamela と Amelia, Mr. B. と Booth は音の類似性がある。
I. P. Watt, "The Naming of Characters in Defoe, Richardson, and Fielding," *RES*, 25 (1949), 337-38.
 - 4) "... it was believed all over the Army that I had married a great Fortune..." (III, vii)
人生の幸福との関連で, Mandeville の説く富に愛が対置されているという見方もある。C. H. K. Bevan, "The Unity of Fielding's *Amelia*," *RMS*, 14 (1970), 94-95.
作者は "Fortune" に現世的利益(富)と来世的利益の両方の意味を持たせて使っているという指摘もある。Dianne Osland, "Fielding's *Amelia*: Problem Child or Problem Reader?," *JNL*, 10 (1980), 58-59.
 - 5) "Nothing, however, can be imagined more agreeable than the Life that the Doctor leads in this homely House, which he calls his earthly Paradise." (III, xii)
 - 6) Sheridan Baker, "Fielding's *Amelia* and the Materials of Romance," *PQ*, 41(1962), 447.
 - 7) Henry Fielding, *Amelia*, ed. Martin C. Battestin, 451, n. 1.
 - 8) "'Indeed,' added [*Amelia*], 'I cannot help saying, he hath some Merit in the Service: For he hath received two dreadful Wounds in it, one of which very greatly endangered his Life...'" (IX, vii)
"merit" と "reward" の問題については, Mona Scheuerman, "Man not Providence: Fielding's *Amelia* as a Novel of Social Criticism," *FMRS*, 20 (1984), 115-18; "*Amelia*/Henry Fielding," *Social Protest in the Eighteenth-Century English Novel*, (Columbus: Ohio State University Press, 1985), 27-29.
 - 9) "the Great State Lottery of Preferment" (XII, ii)
 - 10) 結婚制度については, L. ストーンの前掲書は勿論有用であるが, Murial Britain Williams, *Marriage: Fielding's Mirror of Morality* (Alabama: University of Alabama Press, 1973) の Appendix A, "Marriage Law to 1753" も簡便である。
 - 11) Booth と Bath を共に「兄」としたのは, あくまでも解釈。Peter V. LePage も Booth を兄と捉える。Peter V. LePage, "The Prison and the Dark Beauty of *Amelia*," *Criticism*, 9 (1967), 341.

- 12) 女主人公が遺産を継ぐことによって最終的に地位が高まるのはロマンスの伝統。Baker, 437-49.
- 13) *Monthly Review*, December, 1751, quoted in Frederic T. Blanchard, *Fielding the Novelist: A Study in Historical Criticism* (New York: Russell & Russell, 1966), 80.
- 14) 書き物の中で上流人の名前は明らかにしない伝統があったという。Watt, 329.
- 15) Roger D. Sell は、Amelia との類似性と同時に相違性も有する Mrs. Atkinson の特性を混濁性 (mongrelism) と表現し、それは作者に見えている世界の特性でもあると指摘する。Roger D. Sell, *The Reluctant Naturalism of Amelia* (Abo: Abo Academi, 1983), 51.
- Terry Castle もこのような特性に注目している。Terry Castle, *Masquerade and Civilization: The Carnavalesque in Eighteenth-Century English Culture and Fiction* (Stanford: Stanford University Press, 1986), 237.
- 16) 女同士の友情については、Janet Todd, *Women's Friendship in Literature* (New York: Columbia University Press, 1980), 334-36.
- 17) "Amelia's total Want of all Jealousy and Suspicion" (IV, v)
 "... it is not Want of Sense, but Want of Suspicion by which Innocence is often betrayed." (VIII, ix)
- Cynthia Griffin Wolff は "innocent" の持つ "guileless, ignorant, or simple" という意味が "unsuspicious" という意味につながるという。Cynthia Griffin Wolff, "Fielding's *Amelia*: Private Virtue and Public Good," *TSSL*, 10 (1968), 40-43.
- 18) *Amelia* の世界はまかり間違えば悲劇に転ずる世界。Robert Folkenflik, "Critical Exchange: Purpose and Narration in Fielding's *Amelia*," *Novel*, 17 (1974), 170-71, 174.
- 19) 小間使の罪に対する Booth の姿勢については、Tuvia Bloch, "The Prosecution of the Maidservant in *Amelia*," *ELN*, 6 (1969), 269-71.
- 20) *Amelia* は夫以外の男性に惹かれる自分の性的欲望を弱点として意識しているという見方もある。J. Paul Hunter, "The Lesson of *Amelia*," *Quick Springs of Sense*. ed. L. S. Champion (Athens: University of Georgia Press, 1974), 159-162.
- 21) J. Paul Hunter は、作者は *Amelia* では、人間主体と社会制度のどちら

- の側により問題があるのか、判断がつかかねているという。J. Paul Hunter, *Occasional Form: Henry Fielding and the Chains of Circumstances* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1975), 205-6.
- 22) “. . . *Dalila, Jezebel, Medea, Semiramis, Parysatis, Tanaquil, Livilla, Messalina, Agrippina, Brunichilde, Elfrida, Lady Macbeth, Joan of Naples, Christina of Sweden, Katharine Hays, Sarah Malcolm, Con. Philips*, or any other Heroine of the tender Sex . . .” (I, vi)
- 23) (III, viii)
- お産に立ち会う Booth は、19世紀女流作家の作品に現れる “the woman’s man” or “feminine hero” に相当するという。Joseph Allen Booce, *Tradition Counter Tradition: Love and the Form of Fiction* (Chicago & London: The University of Chicago Press, 1987), 120.
- 24) “The Serjeant had indeed among many other Qualities, that Modesty which a Latin Author honours by the name of *ingenuous* [Bashfulness]: Nature had given him this, notwithstanding the Meanness of his Birth; and six Years Conversation in the Army, had not taken it away.” (IV, vii)
- 25) “With the Spirit of a Tigress, I would have her be a Prude, a Scold, a Scholar, a Critic, a Wit, a Politician, and a Jacobite . . .” (V, ix)
- 26) 後ろの [] 内の表現は第2版では削除されている。
- Gerald J. Butler は Amelia の夫に対する愛は彼に対する性的欲求とその充足と無関係ではないという。Gerald J. Butler, *Henry Fielding and Lawrence’s Old Adam* (Lewiston/Queenston/Lampeter: Edwin Mellen Press, 1992), 116-17.
- 27) 鏡に映った自分の姿に見とれる女性については、Arthur Sherbo, *Studies in the Eighteenth-Century Novel* (East Lansing: Michigan University Press, 1969), 99.
- 28) “The whole was one continued Series of Love, Health, and Tranquillity. Our Lives resembled a calm Sea. . . who can describe the Pleasures which the Morning Air gives to one in Perfect Health . . .” (III, xii)
- 29) 人間愛は神の愛につながる。Allen Wendt, “The Naked Virtue of Amelia,” *ELH*, 27 (1960), 144.